琉球大学学術リポジトリ

# 学級集団内における社会測定的人気度の分析



| メタデータ | 言語:<br>出版者: 琉球大学教育学部<br>公開日: 2011-04-28<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 赤嶺, 利男, 名城, 嗣名, Akamine, Toshio, Nashiro, Shimei<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/19457 |

# 学級集団内における社会測定的人気度の分析 (注1)

助教授　赤　嶺　利　男
助教授　名　城　嗣　明

## I　問題の背景

学校教育が集団的であることから，子どもの社会的適応関係が彼の学習効果に著しく影響するであろうことは言うまでもない。社会的適応が困難な子どもは教育課程の意図する諸領域における発達が阻害されることが多いであろうし，又その反面，社会的適応の容易な子どもにとつては学習経験もより効果的になるであろう。

集団内における社会的適応は，その集団に特有な中心的行動規範 (central behavior norms) への適合の度合によると言われている。(注2) 優れた教科成績が学級集団の中心的行動規範となつているならば，教科成績の優れた子どもは学級集団場面において積極的に行動するようになるだろうし，非行少年のグループでは，そのグループに特有な中心的行動規範，例えば冒険的行動力に適合しない少年は集団内での社会的序列が低下し，或いはグループから完全に疎外されるようなこともあり得る。中心的行動規範に適合しない個人はその集団場面では積極的に行動することが困難になるだろう。

学級内で他の子どもから受容され，承認されている子ども，即ち人気度の高い子どもは，一般的に，知的，人格的諸能力の発達が優れた子どもに多いようである。学校の教育活動が主として学級集団を単位として計画されているため，学級集団における子どもの社会的適応の状態が本人の学級場面での学習活動の能動性，生産性に対して大きな影響を与えるであろうということが予想される。とくに学級集団の中心的行動規範が優れた教科成績に関係しているとすれば，この問題は益々重要である。

集団内における社会的序列や結合・排斥関係については，今まで数多くの研究がなされて来た。その多くは，ソシオメトリーの結果によつて社会測定的地位の上位群下位群を選び知能，教科成績，運動能力，性格特性などの点について両群を比較する方法を用いているようである。

ところで子どもの友人関係の成立の動機は，低学年では偶然的接近が多いが，次第に成績とか体力などの能力の理由で接近するようになり，更に高学年に進むにつれて性格的な理由による交友関係が多くなる。(注3) 長島貞夫氏らは，発達程度及び家庭の社会的経済的地位の相互類似性が接近と結合の重要な要因であるとし，又，向性について相互に類似したものがもつとも多く結合すると述べている。(注4) この交友関係のモメントが能力，性格の諸要因や家庭的背景などについての相互類似性にあるという意見に対して，古籏氏等は客観的相互類似性よりもむしろ「相互に知覚された類似性」，或いは「相互反映的同質感，親和感」が主要な結合要因であると述べている。(注5)

---

注1）　この研究は1964年度琉球大学研究助成費による。
注2）　参考文献　1
注3）　参考文献　7, 8, 9, 17, 18
注4）　参考文献　6, 13
注5）　参考文献　3

相互的類似性，或いは知覚された類似性が交互関係の接近結合の要因として働らくことの外にも，自己に欠けている特性を所有する子どもと同一視することによつて，補償的ないし補充的結合のパターンも見逃がすことはできない。

子どもの学習活動の生産性が学級集団における適応の状態によつて左右されることは重視すべきであるし，この個人の生産性と集団内適応度は一方的因果関係にならないことはすでに述べた通りであるが，とくに長島氏等の集団指導のアクションリサーチで学級内で委員の役割を与えることによつて，学級集団内の社会測定的地位が向上すると同時に，子どもの性格特性にも積極的変化がみられたことが報告されているが，このことから見ても子どもの学習生産性と集団内適応度が相互関連的であることが明らかである。(注6)

Guinouard と Rychlak はアメリカの小学校6年生，男女166名を標本として，作業場面と遊戯場面に分けて社会測定的人気度のパーソナリティ要因を研究した結果，Coasthenia（個人主義的・自己充足的傾向）は男子の方が女子よりも強く，社会測定的地位と Coasthenia は男子では零相関であるが，女子においては何れの場面でもマイナスの相関が有意であつたと報告している。(注7)

上記の研究では，女子においては知能は交友関係の接近の要因とはならないが，男子においては知能，攻撃性の欠如，良心的一貫的行動習慣などが強く働らき，女子では知能よりも協調性が大きな要因として挙げられている。小学校6年生の発達程度では，交友関係の成立の要因に明らかな性差が見られ，又，作業場面及び遊戯場面で社会測定的接近結合の要因の分化が或る程度見られたことに注目すべきである。

## II　目的と方法

### A. 目的

この研究の目的は小学校上級学年児童，とくに6年生を対象として，学級内における社会測定的人気度と子どもの教科成績，知能，性格特性及び自己受容度等の諸要因との関係を吟味し，更に社会測定的接近や選択において，選択する側の子どもと選択される側の子どもの間に如何なる関係が存在するかを明らかにしようとするものである。

更に特殊的には次の諸点が考慮された。

(1)人気度の高い子どもの特徴傾向を吟味する。

(2)勉強や仕事などを含む作業場面における人気度と，遊んだり，ふざけたりするような余暇場面での人気度のそれぞれに関連する要因を比較する。

(3)男子と女子の各々の場合において，作業場面と余暇場面の人気度と関係する要因に差異が見られるかどうかを検討する。

(4)選択する側の子どもの性格能力諸要因とその子ども達によつて選ばれる相手側の子どもの諸特徴の関連性を作業場面と余暇場面及び全体場面でみる。

### B. 方法

1.　標本

那覇市内のK小学校（在籍数2258名）の6年生4学級男女計222名

注6）　参考文献　12
注7）　参考文献　5

2. 資料の収集

1963年8月から9月にかけて資料の収集を行なつた。資料の種類は下に示めす通りである。

a. ソシオメトリツクテスト

b. 自己受容尺度

c. 田中B1知能検査

d. 田研式診断性向性検査

e. 1963年1学期の教科成績評点

ソシオメトリツクテストは謄写版印刷による質問紙を使用し，自分の属する学級の中から「仕事」や「掃除当番」，「宿題」「勉強」などの作業場面で一諸にやりたいと思う好きな人を3名記入させた。更に，一諸に「遊んだり」「ふざけたり」「遠足に行つたり」或いは「テレビを見る」などの余暇場面で3名を選択させた。個々の子どもについて，作業場面，余暇場面の各々及び両方で選択された回数をもつて，それぞれの場面での人気度の指標とした。

自己受容尺度は Spivack の Self Acceptance Scale を基にして名城が日本語版に醸案したものであり，記名式で「はい」「いいえ」「わからない」の三段階の自己評定法50項目を含む質問紙である。(注8)

田研式診断性向性検査では一般向性及び5種目の下位検査によつて社会的向性，思考的向性，劣等感，神経質傾向，感情変易性の諸偏差値が求められる。(注9)

以上のソシオメトリツクテスト，自己受容尺度，田研式診断性向性検査は何れも質問紙法によるものであるが，問題によつては読解力によつて結果が左右される危険性が予想されたので，調査員が学級毎に各項目を音読して聞かせ，子どもに記入させた。なお，教科成績は小学校8教科の評点の総計を用いた。

3. 資料分析の手続き

a. 各変数について男女別に，又，全員の分布を調べ，男女の平均の差を検定した。

b. ソシオメトリツクテストの作業場面余暇場面及び全体場面の各得点相互間の相関を性別及び全員について求めた。

c. 男女別及び全員についてソシオメトリツクテストの場面毎に，人気度に対する知能，教科成績，性格特性等9種の変数の偏差積相関を求めた。

b. ソシオメトリツクテストで選択する側の子どもの性格，能力に関する諸変数とその子どもによつて選ばれた子どものそれらの変数の連関を上中下の3段階の3×3分割表の$x^2$検定によつて調べた。

## Ⅲ 結果の分析

### A. 各変数の分布状態

各変数の分布状態は Table 1. の示すごとくであり，ソシオメトリツクテストによる各場面の得点を除いては，おおむね正規に分布していた。ソシオメトリツクテストの得点は作業・余暇の両場面及び全体得点ともに著しく積極的な歪曲が見られた。

男女間に平均の差が有意であつたのは，向性検査の神経質と感情変易性の2下位検査のみであ

注8）　参考文献　14
注9）　参考文献　19

Table 1.　各変数の平均値及び標準偏差

| | 男 | | | 女 | | | 全員 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | N | M | SD | N | M | SD | N | M | SD |
| 作業場面得点 | 110 | 2.91 | 2.85 | 112 | 2.91 | 2.43 | 222 | 2.91 | 2.65 |
| 余暇場面得点 | 110 | 2.95 | 2.38 | 112 | 2.86 | 2.51 | 222 | 2.91 | 2.44 |
| 全体場面得点 | 102 | 5.86 | 4.67 | 112 | 5.77 | 4.31 | 222 | 5.82 | 4.49 |
| 知　　能 | 108 | 48.1 | 10.06 | 99 | 46.1 | 12.08 | 201 | 47.1 | 11.10 |
| 社会的向性 | 108 | 38.3 | 7.83 | 110 | 39.0 | 12.45 | 218 | 38.6 | 10.49 |
| 思考的向性 | 108 | 45.5 | 7.68 | 110 | 45.5 | 7.28 | 218 | 45.5 | 7.48 |
| 劣　等　感 | 108 | 47.6 | 13.86 | 110 | 50.6 | 12.74 | 218 | 49.2 | 11.38 |
| 神　経　質 | 108 | 51.8 | 8.86 | 110 | 47.0 | 9.62 | 218 | 49.4 | 9.42 |
| 感情変易性 | 108 | 57.1 | 11.30 | 110 | 53.9 | 11.09 | 218 | 55.5 | 11.30 |
| 一般的向性 | 108 | 47.6 | 5.38 | 110 | 46.7 | 5.86 | 218 | 47.2 | 5.74 |
| 自己受容度 | 109 | 5.72 | 12.61 | 109 | 6.66 | 12.36 | 218 | 6.19 | 12.49 |
| 教科成績 | 108 | 23.5 | 6.40 | 107 | 24.7 | 6.28 | 215 | 24.1 | 6.37 |

り，女子は1％の危険率で男子よりも神経質傾向が強く，男子は5％の危険率で女子よりも感情変易性が高い。[注10] 知能及び一般向性については男子が稍高く，教科成績においては女子が稍優れているかの如くに見受けられるがその差は有意ではない。

**B.　各場面別得点の相互間の相関**

ソシオメトリツクテストの男女別及び全員についての作業場面，余暇場面及び全体場面の得点相互間の相関は Table 2. の示す通りである。男女別或いは全員の何れの場合でも作業場面得点と余暇場面の得点の間の相関係数がもつとも低く，各場面別得点とソシオメトリツクテスト全体の得点との間の相関は相当に高かつた。このテストが極めて簡易な質問紙によるものであつたことから，被検者の年令段階では作業場面と余暇場面の弁別・分化が困難ではなかろうかと予想されたが両場面間の相関係数が.53ないし.59の範囲内にとどまつたので一応の分化が可能であつたことが認められる。場面別得点相互間の相関には性別による差異は認められなかつた。

Table 2.　ソシオメトリツクテストの場面相互間の相関

| | 作業—余暇 | 作業—全体 | 余暇—全体 |
|---|---|---|---|
| 男 | .59 | .91 | .87 |
| 女 | .53 | .87 | .88 |
| 全　員 | .56 | .89 | .88 |

**C.　人気度と諸変数の関係**

ソシオメトリツクテストの作業場面，余暇場面，或いは全体の得点に対して有意な偏差積相関を示めしたのは，知能，社会的向性，全体向性，自己受容尺度及び教科成績であつた。診断性向性検査の下位検査得点のうち，思考性向性，劣等感，神経質，感情変異性などの4種の変数とソシオメトリツクテストによる人気度との関係は有意ではなかつた。

ソシオメトリツクテストの場面別及び性別の人気度と各変数との偏差積相関は Table 3. に示

注10）　感情変易性の高いのは気分が移り変わりやすく，自己の感情を率直に表現する方であり，その反対に低いのは慎重で，どちらかと言えば無表情な傾向になる。

す通りである。一般的に，教科成績は性，場面を問わず，常に有意な相関を示しているが，とくに余暇場面よりは作業場面に，又，男子よりは女子の場合に強い相関を示している。このことは外面化された能力としての教科成績が人気度と密接な関係をもち，又とくに能力を必要とすると

Table 3. 人気度と各変数の偏差積相関

| | 作業場面 | | | 余暇場面 | | | 全体場面 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 全体 | 男子 | 女子 | 全体 | 男子 | 女子 | 全体 | 男子 | 女子 |
| 知能 | .28** | .28** | .29** | .17* | .18 | .16 | .08 | .09 | .05 |
| 社会的向性 | .36** | .62** | .22* | .29** | .48** | .19 | .36** | .62** | .06 |
| 思考的向性 | .00 | .07 | −.04 | −.01 | .04 | −.06 | .01 | .09 | −.02 |
| 劣等感 | .06 | .09 | .03 | .04 | .02 | .00 | .08 | .11 | .02 |
| 神経質 | .01 | .17 | .18 | .01 | .12 | .06 | −.04 | .18 | .08 |
| 感情変易性 | .10 | .07 | .05 | .13 | .19 | .07 | −.02 | −.05 | −.01 |
| 一般的向性 | .16* | .29** | .03 | .13 | .23* | .04 | .16* | .29** | .01 |
| 自己受容度 | .20** | .22* | .09 | .06 | .05 | .07 | .28** | .31** | .25* |
| 教科成績 | .49** | .47** | .53** | .31** | .31** | .32** | .55** | .49** | .61** |

（*は5％で有意，**は1％で有意）

思われる作業場面においては，選択要因として強く働らくことを示めしていると言えよう。

社会的向性の外向傾向は男子の場合にとくに著しい積極的相関を示している。又，男子の場合，とくに作業場面との相関が目立つて強い。男子については，他の何れの変数と比較してみても，社会的外向傾向が人気度ともつとも強い相関を示していることが注目される。女子の人気度の要因が優れた教科成績であることとは対照的に，男子の人気度の要因は社会的外向性にあるように見受けられる。

なお，社会的向性が男子の場合は常に1％の危険率で有意であつたのに対して，女子の場合は，僅かにソシオメトリツクテストの全体得点のみに対して5％の危険率で·22の相関で有意であつたに過ぎず，女子の作業・余暇両場面においては，5％の危険率でもなお有意となり得なかつた。

その他の変数については，ソシオメトリツクテストとの相関が微小であつたが，知能はソシオメトリツクテスト全体得点に対して，多少の相関関係を有し，又，全体向性の外向的傾向は，男子の場合においてのみ，有意な相関を示した。自己受容度は余暇場面の人気度に対して，性別を問わず，零相関であつたが，作業場面については，男子の場合に1％，女子の場合には5％の危険率で有意な相関が求められた。

これらの相関関係（Table 3 参照）は何れも偏差積法によるものであり，人気度の指標となつたソシオメトリツクテスト得点が著しく積極的な歪度を示していることを考慮すると，観察された相関関係は人気度の高い一部の子どもの特徴によつて誇張されたという可能性も考えられる。したがつて，作業場面，余暇場面及び全体の各得点分布について，得点の小さいものから標本の約2分の1を選び，偏差積相関を計算した結果は，殆んどすべての相関が零相関に近くなつた。女子の作業場面人気度と教科成績の相関は·28で，5％の危険率で唯一の有意な相関となつ

ているが，一般的には，作業場面の人気度と教科成績が，有意ではないが，多少の積極的相関を示した。いずれにせよ，著しい歪度の原因となつたものはソシオメトリツクテストの求めたものが人気度のうちの積極的側面，すなわち接近傾向のみであつて，消極的側面，すなわち排斥傾向が除外されていたことにあるものと思われる。

**D.　選択者と被選択者の特徴の連関性**

各変数について，子どもを上中下の3段階に分類し，$x^2$ を用いて個々の子どもとその子どもが選んだ相手の子どもとの対応関係を調べた結果，有意な連関関係が見られたのは，Table 4 の示す通りである。選択者，被選択者相互間の連関は，どちらかといえば，女子よりも男子において強く，又，作業場面において目立つている。これらは連関が有意でありながらC（定性相関）係数にして僅かに.19ないし.34という低いものであり，予測的可能性に乏しい。しかしながら，その中では教科成績でもつとも顕著であり，知能及び思考的向性に関して連関が認められることから，子どもの社会測定的な接近においては，或る程度，教科成績，知能，思考的向性等の点で自分と近接的地位にあるものを選択する傾向にあり，又，とくに作業場面での接近結合にこの傾向が著しいことがうかがわれる。なお，男子の作業場面における社会測定的接近では，作業場面の人気度が1％で有意な連合（$x^2$）を示した。

Table 4. 選択者と被選択者相互間の連関

| 性 | 場面 | 変　数 | $x^2$ | 危険率 | C係数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 作業 | 知　能 | 15.6 | <.01 | .23 |
| | | 思考的向性 | 14.8 | <.01 | .21 |
| | | 教科成績 | 39.8 | <.01 | .34 |
| | 余暇 | 神経質 | 11.4 | <.05 | .19 |
| | | 教科成績 | 17.9 | <.01 | .24 |
| 女 | 作業 | 知　能 | 10.4 | <.05 | .19 |
| | | 教科成績 | 17.9 | <.01 | .24 |

## 考　　察

1.　使用されたソシオメトリツクテストにおける人気度については作業場面・余暇場面間にいくらかの分化が見られた。とくに自己受容度は作業場面の人気度に対してのみ有意な相関を示したが，教科成績，社会的外向傾向及び一般的外向傾向もとくに作業場面の人気度に対して，より積極的な相関関係を有することが明らかである。

2.　女子の場合は教科成績と人気度の関係が目立つて強く，男子の場合には教科成績も相当な関係を有するが，それ以上に社会的外向傾向が著しく大きな役割を果しており，又，多少低目ではあるが，一般的外向傾向や自己受容度の高さも有意な相関を示した。

3.　ソシオメトリツクテストは積極的人気度のみをとらえたので，分布は著しい正の歪曲を示したが，排斥傾向などの消極的人気度も同時に考慮したならば正規分布に接近したであろう。

4.　社会測定的接近における選択者・被選択者相互間の諸変数の連関は作業場面において著しく又，女子よりも男子に強い傾向が見られる。教科成績，知能などの能力的要因及び思考的向性，或いは物の考え方等が比較的に連関の強い変数となつているが，何れも予測的可能性は不充分と思われる。

5.　男子と女子は社会測定的接近で異なつたパターンを示している。男女の比較では，a）男子の場合には，社会測定的接近に積極的な関係をもつた性格，能力等の要因が多く，とくに社会的外向傾向及び自己受容度などが強く関与しているが，b）女子においては，教科成績のみが社会測定的接近に強く関与しており，又，c）男子の方に自他類似性による接近がやや多い。

6. 使用されたソシオメトリツクテストでは余暇場面よりも，作業場面の方に選択的接近が多く見られ，余暇場面では人気度と有意な相関を示した変数が少なく，選択者・被選択者間の連関が有意となつた変数も少ない。

7. 集団の中心的行動規範によつて人気度の要因が変化すると仮定するならば，この標本では，すでに男子と女子のそれぞれの場合に固有の中心的行動規範が形成されつゝあるのではないかと考えられる。更に，集団内の社会的序列が接近している場合に個人間の相互作用が頻繁になるという仮定が妥当であるとすれば，この標本の男子の集団では社会的外向傾向，自己受容傾向，及び優れた教科成績などが，又，女子の集団では主として優れた教科成績が中心的行動規範に属してそれぞれの集団の社会的序列に影響し，これらの要因で類似した子ども達相互間では接近が起りやすいのではなかろうかと思われる。

## V 結　　び

子どもの個人的な性格・能力等の諸特性がその子どもの社会測定的な人気度を決定する普遍的且つ客観的条件となるのではなく，社会測定的人気度は，むしろそれぞれの集団に固有な文化に依存する面が多いと思われる。Guinouard 等の研究とこの研究の結果が特殊的な領域では一致しない点が多いこともその一例であろう。

集団の文化構造，とくに集団内で支配的な価値観を認識することが，子どもの集団内における適応の可能性を理解するために必要であると思われる。又，その反面，社会測定的人気度や社会的序列を調べることが集団内の文化構造を認識する手がかりとなり得るであろう。

言語的手段による社会測定的方法では現実の社会関係を正確にとらえることが困難であるということは当然であるが，この研究では従来，社会的接近の要因として考えられて来た相互類似性相互類同感，又は補償的同一視傾向，或いは社会測定的人気度の要因として考えられて来た知能教科成績，性格，向性等が何れも予測的可能性を有する程決定的な連関性をもつていないことが明らかであり，これらはむしろ集団独自の中心的行動規範及びそれによつて形成される社会的アクセプタビリテイと社会的序列に依存し従属的な地位を占めているものと考えられよう。

## 参　考　文　献


1. 馬場明男・早川浩一（共訳），Homans, G. C., *The human group.* (W. F. Whyte: The North Street gang)，昭34，誠信書房
2. Busswell, M.M., "The relationship between the social structure of the classroom and the academic success of pupils." *Journal of Experimental Education*, 1953.
3. 古旗安好，学級の教育社会心理学――自主的社会人の形成，昭37，明治図書
4. Grossmann, B. & Wrighter, J., "The relationship between selection and rejection and intelligence, social status, and personality amongst sixth-grade children." *Sociometry*, 1948.
5. Guinouard, D.E. & Rychlak, J.F.; "Personality correlates of sociometric popularity in elementary school children." *Personnel and Guidance Journal*, 1962.
6. 今崎秀一：交友と向性，**心理学研究**，昭15.
7. 兼子宙・尾島碩心・宮幸一：児童の学級内に作る友人関係について――学級形態の研究，第1報，**心理学研究**，昭6.

8. 同上，第2報，**心理学研究**，昭7．
9. 同上，第3報，**心理学研究**，昭7．
10. 小室庄八：小学校児童の交友関係，**児童心理**，昭24．
11. 同上：交友関係の成立に及ぼす民族の要因について，**心理学研究別冊**，昭25．
12. 長島貞夫・田中熊次郎・中野佐三・斉藤定良・中村陽吉，社会的役割の加工の性格並びに集団に及ぼす影響について——集団指導のアクションリサーチ（第4分冊）1956，輿論科学協会
13. 長島貞夫，児童社会心理学，昭31．
14. 名城嗣明，自己受容と他人受容との関係についての実験的研究，**琉球大学教育学部研究集録 第5集**，1961
15. 大西誠一郎，リーダーシップの年令的発達，**児童心理** 昭31．
16. 奥野明，相互結合・反感における personality 因子，**日本心理学会論文集**，昭31．
17. 阪本一郎，児童の生活と教育，牧書店，昭25．
18. 田中熊次郎，学級社会における結合と分離，**児童心理**昭22．
19. 田研式診断性向性検査（手引）日本文化科学社，昭29．

# An Analysis of Sociometric Popularity of Children in the Classroom

(Abstract)

By

**Toshio Akamine & Shimei Nashiro**

The pupose of this study was to examine the relationships between the sociometric popularity and the variables pertaining to the intelligence, personality, and academic achievement of children in the sixth-grade classroom. The study involved 222 boys and girls in a public school of Naha, Okinawa. The tests and questionnaires used were 1) a non-verbal group intelligence test, 2) a sociometric quetionnaire, 3) a self-acceptance scale, and 4) a diagnostic personality test, which altogether yielded a total of twelve variables.

The girls were found to be slightly, but significantly, more nervous and less temperamental than the boys, but otherwise the differences between sexes in these variables were not statistically significant. The popularity in the "work" situation and that in the "leisure" situation as presented in the sociometric questionnaire were differentiated substantially by both boys and girls. The self-acceptance score correlated significantly with the popularity only in the "work" situation while the academic achievement (the average grade), the social extrovertedness, and the general extrovertedness generally correlated more strongly with the popularity in the "work" situation than in the "leisure" situation.

Among the girls, the academic achievement was the most outstanding one of the few positive correlates of the popularity, whereas among the boys it was only one of the several variables showing moderate degrees of correlation with the popularity. For the boys the correlation yielded by the social extrovertedness was the most pronounced of all. The variables used in this study generally tended to correlate more positively with the "work" situation popularity than with the "leisure" situation popularity, and also more positively among boys than among girls.

The correspondent relationships between the characteristics of the child and those of children whom he would choose as partners was more clearly observable in the "work" situation than in the "leisure" situation. Upon the Chi-square test, such variables as the popularity, the academic achievement, the intelligence, and the extrovertedness in reasoning were significantly associated with one's choice of his partners: the child tended to choose as his partners children who had similar characteristics in these variables. This trend was more

noticeable among boys than among girls. The level of such associations was too low, however, to be of use for prediction purposes.

The results indicate that the sociometric popularity of children in the classroom is not dependent decisively upon, or predictable from, any of the variables examined in this study. Neither is it possible to predict from such data the probable pattern of sociometric association for a given child. Whatever statistics found to be significant are not sufficient as basis for making predictions. That the results of this study and studies reported by others do not show consistent components of children's sociometric popularity or association may indicate that those specific variables as have been studied and found to be statistically significant in one situation or another are only partial determinants of the popularity or the association dependent, in varying degrees, upon the scale of the social acceptability and the social ranking system which are defined in each specific social group in accordance with the group's own unique system of central behavioral norms.